

# Jennie Gerhardt における自然空間の二面性 — ジェニー像が示す「都市化する自然」と「牧歌的自然」

土屋 陽子

## 1. はじめに

従来、特に世紀転換期のアメリカ文学には反都市社会 (Anti-Urban) の傾向が強く見られると言われている。しかし、James L. Machor が自身の論文の中で Bernard Rothenthal の見解を例にあげながら主張しているように、アメリカ小説の中で都市は牧歌に対立するものとしてだけではなく、個人、あるいは国家にとって有益なものとしても度々示される (228)。Machor は、このことは特にアメリカの都市小説に顕著であるとし、Henry James や William Dean Howell と共に Theodore Dreiser を挙げ、彼らは「都市の冷酷さ、廃頹ぶり、人工的な側面を描写しようとしているが、同時に彼らの作品の中には、都市の豊かさや豪華さ、可能性に対する賛辞も示されている」と指摘している (229)。ここには、都市の魅力に強くひきつけられつつも、未だ自然に抱く理想を棄て切ることができないという、当時の人々の葛藤が示されていると考えられる。

Raymond Williams の著書 *The Country and the City* の冒頭にみられる定義によれば、一般に都市は、学問、コミュニケーション、文明といった、発展した生活に関わるイメージを持つものであり、一方田舎は、平和、無垢、純朴といった、自然的な生活に関わるイメージを持つものであると捉えられる (1)。この都市 (the urban) と牧歌 (the pastoral) という二項対立は、資本主義の影響を受けて都市化する社会に見られる重要なテーマの 1 つであり、都市に住む人々は次第に都市社会と牧歌的自然の相補的な関係、あるいは両者の「共存」を理想 (urban-pastoral ideals) として抱くようになる (Williams 11-20)。そして、アメリカの都市小説家たちもまた、そういった「共存」に対する理念に興味を示すようになったのである。Machor が指摘するように、一般に世紀転換期のアメリカ都市小説家はこの 2 つの空間を対立する生活様式として捉え、人々の抱く都市と牧歌の「共存」に対する理想を皮肉的な観点で描き、都市化していく自然空間に批判的な態度を示していると解釈されている。<sup>1</sup>

都市小説家の代表といわれるドライサーもまた、作品の中で都市と牧歌の関

## 2 土屋 陽子

係を繰り返し描いている。Machor はドライサーの処女作である *Sister Carrie* を挙げ、彼もまた皮肉的な観点で二空間の「共存」を描いていると述べている(331)。ドライサーは『シスター・キャリー』のなかで、キャリーの人生を牧歌的自然とは完全に切り離しながらも、<sup>2</sup> 都市で生活する彼女にしばしば自然への憧れを抱かせている。<sup>3</sup> そして、そのようなキャリーが満たされることなくホテルの最上階でむなしさを感じているという作品の結末には、確かにドライサーの、二空間の「共存」という理念に対する皮肉的な観点がうかがえる。<sup>4</sup>

しかしながら、都市と牧歌的自然の共存に対するドライサーの態度は必ずしも常に否定的であったわけではない。それを示すのが、『シスター・キャリー』から 10 年を経て発表された彼の長編第 2 作目 *Jennie Gerhardt* (1911) である。ここでの都市と牧歌の描かれ方は、『シスター・キャリー』に見られたものとは大きく異なっている。そのことは作品における主人公 Jennie と、その周りの人々との関係の描写をみると明らかである。

ジェニーについてはこれまで様々な解釈がなされてきた。彼女もキャリーと同様、2 人の男性の愛人となることで経済的に救われているし、男性を介して都市の華やかな生活を知っていく。さらにジェニーは 1 人目の男との間に子供を持ち、子持ちで未婚という当時の社会的慣習に背く生き方をしている。このことから、ジェニーをキャリーと同様、資本主義下で都市化する社会に対するドライサーの否定的な見解を示す役割を果たすものとして捉える解釈も多い。<sup>5</sup> しかし、Laurence E. Hussman が指摘するように、キャリーが私欲を満たすために行動し、最終的に大都会ニューヨークの中心地に住居することを好んでいる一方で、ジェニーは “model of selfless” (50) として描かれ、彼女の欲望は常に彼女の周りにいる人々を助けることに向けられている。そしてジェニーは都会に住む機会が与えられるにもかかわらず、より静かで自然に囲まれた場所で生活することを好む。また、キャリーは物欲のために男を利用し、結局愛情を放棄するが、ジェニーは最後まで 2 人目の愛人 Lester への愛を棄ててはいない。ジェニーもキャリーと同様、一見時代の慣習に逆らった先進的な女性のようにも捉えられるが、実際の彼女の性格はむしろ極めて保守的なものとして描かれているのである。このような保守的な側面に注目して、Sybil B. Weir は、“Jennie is that rare woman who exists only to satisfy the man’s need.”(66) と述べており、また、Clare Virginia Eby も、レスターがジェニーに惹かれた理由は、彼女が “perfect homemaker for family” としての素質を持っているからだとして指摘している (152)。このようにジェニーを、男性的視点からみた “ideal woman” として捉える解釈も多い。

つまり、『ジェニー・ゲアハート』においてジェニーは、古い社会の慣習に背き、都市化していく「新しい女性」<sup>6</sup> である一方、牧歌的イメージを持つ “ideal woman” としても描かれているのである。ドライサーがジェニーを、新しさと古さを併せ持つ二面的な女性像として描いたことが分かる。では、ジェニーのこの二面性は、資本主義社会という枠組でみた時、本作品の中で何を示しているのだろうか。この二面性にこそ、先述した都市と牧歌的自然の「共存」という理想が表象されているとは考えられないか。

John B. Humma は『ジェニー・ゲアハート』を「都市社会や、物質主義的思考から逃れたいというレスターの願望」を描いた「都市小説」として指摘しているが (157)、<sup>7</sup>この “escape from the city” という考えは、Leo Marx が著書 *The Machine in the Garden* の中で、都市に生きる人々の「精神的パストラリズムの傾向」として示している “flight from the city” (5) という記述を連想させる。都市に生きる人々のパストラリズムについて Marx は、以下のようにも述べている。

Although scientific knowledge seemed to drain certain traditional religious myths of their cogency and power, so that it no longer was quite possible to read Genesis as it once had been read, the same knowledge enabled artists to invest the natural world with fresh mythopoetic value. (96)

そして Marx は、牧歌的自然のイメージを宗教的メタファーとして用いることが普及したことを指摘しているが (100)、これは当時の人々が自然を神聖なもの、理想的なものとして捉えていたことを明示している。さらに彼は、人々が「都市の富やパワーに熱中しつつその目的を田園的な幸福の追求としていた」 (216) ことを指摘し、都市社会下で人々が都市と牧歌的自然の「共存」という理想を抱くようになったことを明らかにしているが、一方で、人々の理想通りにこの二面的な空間が共存することは不可能であるということも同時に主張している。Marx は、“old symbol of reconciliation is obsolete.” と述べ、以下のように主張する。

[...] in the end the American hero is either dear or totally alienated from society, alone and powerless, like the evicted shepherd of Virgil's eclogue. And if, at the same time, he pays a tribute to the image of a green landscape, it is likely to be ironic and bitter. (364)

#### 4 土屋 陽子

つまり人々は、都市に富やパワーを求めるか、牧歌的自然に安らぎを求めるかのどちらかを選択しなくてはならないといい、そのような見解がアメリカ都市小説においても見られるというのである。

この選択の必要性は、『ジェニー・デアハート』においても、ジェニーとその周辺の人々、特にレスターとの関係の描写に顕在している。しかし、先述したように、ジェニーの二面性に着目し、彼女を都市と牧歌的自然の「共存」という理念を示すものとして捉えると、ドライサーがそのような選択の必要性という見解に賛成の立場で本作品を描いたかどうかは疑わしい。先に挙げた Humma の言葉も示すように、これまで本作品は、レスターの不安定な描写に着目しその二面性を指摘することで、ドライサーの、2つの空間の「共存」に対する否定的見解を示すものとみなされてきた。<sup>8</sup> しかしここで、レスターの二面性には必ずジェニーの存在の有無が関わっているということに注意しなければならない。ジェニーの持つ二面性が、社会におけるレスターの不安定な立場の原因となっているのである。そして、そのようなジェニーの本作品における描かれ方について着目すると、ドライサーが必ずしも皮肉的な立場から、都市と牧歌的自然という2つの空間の相補関係を描いているのではないことがみえてくる。ドライサーは作品の結末においてジェニーを、彼の他作品の主人公に比べ、不幸には描いていない。むしろ好意的に描いている。それらを考慮すればドライサーが、作品の中でジェニーが示すもの—都市化する空間と牧歌的空間の「共存」という理念—に対し肯定的立場をとっているとも考えることができる。つまり、本作品においてドライサーは、ジェニーを通し、「都市化する自然」と未だ人々にとって理想となる「牧歌的自然」という、自然の持つ二面性を示し、その上で彼自身が抱く、両者の相補的關係に対する理想も示したと考えられるのである。

そこで、本論ではまず、本作品における「都市」と「牧歌」、及びその関係が登場人物によりどのように示されているかを明らかにし、さらに、二面性をもつジェニー像の描かれ方に着目することで、そこに示されたドライサーの見解を読みとる。

#### 2. レスターとジェニーに示された「都市」と「牧歌」

本作品の中で、ドライサー自身の牧歌的自然及び都市社会に対する見解を示す記述は少ないが、それぞれに一箇所ずつ、無視してはならない以下のような記述がある。まずは、ドライサーの自然に関する見解である。これはジェニーが父により家を追い出された直後の場面において見られるものである。

Flashes of inspiration come to guide the soul. In nature there is no outside. When we are cast from a group or a condition we have still the companionship of all that is. Nature is not ungenerous. Its winds and stars are fellows with you. Let the soul be but gentle and receptive, and this vast truth will come home—not in set phrases, perhaps, but as a feeling, a comfort, which after all, is the last essence of knowledge. In the universe, peace is wisdom. (93-4)

これに対し、都市社会に関する見解として、以下のような記述が見られる。これはレスターについてのドライサーの説明文である。

We lived in an age in which the impact of materialized forces is well-high irresistible; the spiritual nature is overwhelmed by the shock. [...] We are weighed upon by too many things.

Lester Kane was the natural product of these untoward collections.  
(133: emphasis mine)

ここでドライサーは“too many things”の具体例として、列車や郵便、電話、新聞等、文明の発展を示すものを挙げているが、これらの見解は先に示した Williams の田園と都市の捉え方の解釈にも当てはまる。そしてこの都市に対する記述がレスターがジェニーに魅了された直後にみられる記述であることを考えると、“the spiritual nature”はジェニーを、それを“overwhelm”するのが都市に暮らすレスターを示唆していると考えられる。ドライサーが、ジェニーに牧歌的自然を、レスターに都市を表すものとしての役割を与えていることが分かる。<sup>9</sup>

ジェニーと牧歌的自然との結びつきの描写は、“The spirit of Jennie—who shall express it?”という記述から始まる『ジェニー・ゲアハート』の第2章に早くも見られる。ドライサーはここでジェニーを“a creature of mellowness of temperament”とし、そのような彼女は“Caged in the world of material, however such a nature is almost invariably an anomaly.”(15)と述べ、ジェニーが物質世界の外側にいる存在であることを示している。そして、ジェニーと自然空間を結びつける以下のような記述もしている。

When the days were fair she looked out of her kitchen window and longed to go where the meadows were. (16)

When the soft, low call of the wood-doves, those spirits of the summer, came out of the distance, she would incline her head and listen, the whole spiritual quality of it dropping like silver bubbles into her own great heart.  
(16)

ジェニーが自然の美しさに共感し、心を寄せる娘として描かれているが、第2章で描かれるこのジェニー像は作品の最後まで一貫して見られるジェニーの描写である。例えば、the wood-doves とジェニーとのつながりは、1人目の愛人 Blander の死後、妊娠が分かったジェニーが父親に勘当され、Columbus 南部地域の田舎に借りた部屋で生活をしているときの描写にも見ることができる。ドライサーはここでジェニーを“flower of womanhood” と言い “Jennie was left alone, but, like the wood-doves, she was a voice of sweetness in the summer-time. Going about her household duties, she was content to wait, without a mummer [...]” (100) と述べ、ここでも自然の美しさと結びつけている。

また、ジェニーを好んで家事をする女性としても描き、さらに出産直後の彼女について “She had been born with that nothing quality which makes the ideal mother.” (92) と述べ、家事、子育てを好んで行うジェニーが生まれつき理想的な女性であることを示している。このように理想的な女性としてジェニーを描いた上で自然と結びつけることで、彼女を人々の理想となる牧歌的な自然を示すものとして存在させているのである。

そして、この牧歌的自然に影響を与えるものとして作品の中で都市が示されるのであるが、それを表象しているのがジェニーの2人目の愛人である Lester Kane である。牧歌的自然を示すジェニーに対して都市を示すレスターという構図は、ジェニーが家政婦として働く Bracebridge 家で、2人が初めて出会った時に抱く互いの印象にまず見ることができる。レスターはジェニーに対して “pre-eminent femininity” (128) を感じ、普段自分の周りには見られないタイプだとし、さらに “This girl was a rare flower” (132) と彼女を花に例え、自然の美を感じている。一方ジェニーは、レスターを前に “He was from Cincinnati!” と都市から来たことに関心を示し、“He was so big, so handsome, so forceful.” (127) とその力を感じ、都市における彼の職業について思いを巡らす。

牧歌的自然を示すジェニー、都市社会を示すレスターという役割の構図は作品の最後まで崩されない。それは、娘の死に直面したジェニーがシカゴの郊外

である Sandwood という自然豊かな田舎町に住むことになった時、かつてレスターと交わした会話を思い出す場面にも見ることができる。ジェニーとレスターは以前、馬車でサンドウッドを通り過ぎたことがあったが、その時ジェニーはその場所の平和で牧歌的な風景に心ひかれ、レスターに “I should like to live in a place like this sometime.” という。しかし、それに対しレスターは “It’s too withdrawn.” (365) と答え、自分にはもっと都会での生活のほうが好ましいと言う。このやり取りは、ジェニーが牧歌的自然と結びついているのに対し、レスターが都市社会に結びついていることを示すと同時に、ジェニーとレスターの住む世界が最後まで分けられたものであることも示唆している。

### 3. ジェニーの二面性に示された「共存」の理念

#### ① 都市化する自然 —ジェニーが示す「共存」の否定

しかしながら、ジェニーとレスターの関係に目を向けると、ジェニーが示すものが最後まで形を崩さない牧歌的自然空間のみであるというわけではないことが分かる。ジェニーに惹かれたレスターは、早くも二度目の訪問時に仕事中のジェニーに声をかけ彼女を口説き、ニューヨークへの出張旅行に付いてくるように言う。突然の申し出にジェニーは驚くが、この出し抜けて威圧的な提案には、牧歌的自然を都市の一部として取り込もうとする動きを読み取ることができる。結局ジェニーは、レスターに付いてニューヨークに行くことを決意するのだが、彼女を連れていけることになったレスターは「自分が手に入れた物を誇りに」感じ、「ニューヨークへ行ったら本物の服や装飾品を買い、ジェニーがどんなに華やかになれるかを見せてやる。」とジェニーに言う (174)。ここにもジェニーを取り込もうとするレスターの意図がみられる。レスターに従うことで都市社会の影響を受けていくジェニーの描写は、都市化する自然を示していると考えられる。このような自然の都市化の過程は、ジェニーがレスターのものとなった後、2人が住居を Cleveland, Chicago, そして New York と、さらなる大都市へと移していくことにもみることができる。

このようにジェニーは、牧歌的自然を表すと同時に、それが都市化されていく過程を表してもいるのである。そしてそこからは、都市に吸収されてしまう自然という、都市に対し弱い立場におかれた自然も読み取ることができる。レスターからの申し出を拒み続けていたジェニーだが、その様な時にジェニーの父が仕事の中に手に火傷を負い失職してしまう。一家が再び生活に困るという境遇でジェニーは、 “There were really no alternatives, she thought. Her own life was a failure.” (159) と考え、レスターの力を頼る決意をする。ここに示された

failure という単語は、“shamefully”、“shamelessness”、“ashamed”といった単語と共に、作品の中でゲアハート家の描写をする際に何度か使われる単語である。一方、レスターの家族であるケイン一家の描写には、“proud”、“prideful”、“authority”といった単語が使われている。<sup>10</sup> ジェニーを牧歌的自然を表す存在として捉えると、都市に対し自然が弱者として示されていることが分かる。さらに、ここでのジェニーの決意は、牧歌的自然の都市に対する屈伏を示し、都市化を選択しなければ生き残れないという選択の必要性、つまり都市と牧歌的自然の「共存」という理想の否定を示すものと考えられる。

自然が都市に対し弱い立場にあること、そして、都市化を選択しなければ社会で生き残ることはできないという選択の必要性は、ジェニーとの関係を通してみられるレスターの社会的立場の移り変わりをみても明らかである。特にそれはレスターの父が残していった遺書に顕著である。ケイン家の主、Archibald は事業家として大成功した男であるが、死去する際、遺産相続についての遺言を残していく。そこには「次男レスターの身の上起こったある問題のために、財産分与に関して、私はある条件を付ける義務を感じる。」(294) と記されており、その条件というのは、「3年の間、レスターには年1万ドルを与え、その3年のうちに彼は二者のうち一方を選択しなければならない。第一、ジェニーと別れ父の希望通り正しい生活に入ったら、彼の受け取るべき財産は直ちに公布される。第二、ジェニーと結婚しても良いが、その場合彼は一生、年に1万ドル受け取るにとどまる。」(295) というものであった。レスターの立場を考えると年1万ドルは少なすぎる金額である。ここには、ジェニーを選べばレスターの物質的豊かさは危うくなる、ということがはっきりと示されており、都市社会へ行けば生活が保証されるが自然空間へ行けば生活の保証が得られないということを読み取ることができる。遺書にはさらに、もしレスターがジェニーと結婚もせず別れもしない状態、つまり都市と牧歌的自然どちらかを選択することをしなければ、レスターへの相続は全く無くなる、ということも記されている。ここにも選択の必要性が示され、両者の「共存」という理念の否定をみることができる。

この遺言を受けレスターは、ケイン家と離れ自立してやっていけるかを試すために会社を辞め、土地投機事業を始めようとする。そして土地周旋業の Ross 氏と手を組んで郊外の土地を買い、“Inwood” と名付け、郊外へ住みたい人に売却するという事業を企てる。それが以下の場面である。

The land was put in excellent shape. It was given rather attractive title



— “Inwood,” although, as Lester noted, there was precious little wood anywhere around there. But Ross assured him that people looking for a suburban residence would be attracted by the name, seeing the vigorous efforts in tree-planting that had been made to provide for shade in the future, they would take the will for deed. (332: emphasis mine)

ここに記された「インウッドという名が人々をひきつける」というロス氏の考えには、自然のある空間というイメージが、都市に住む人々の憧れとなっていることを示している。

つまり、当時の人々が都市で生活しながらも、住居としては森のある自然空間を理想としていたことがここには示されているのである。そして同時に、人々がそのような自然のイメージを利用し、利益を得ようとする動きが都市においてみられるようになったことも示唆されている。しかし、この事業は結局失敗に終わる。その土地の近隣に **International Packing Company** が会社を建てることになり、“Inwood” のセールスポイントであった、自然のある空間というイメージが崩れてしまったのだ。自然を開拓し理想的な場所として提供することで利益を得ようとしたレスター達の試みは、シカゴで力をつけた缶詰産業の郊外進出により失敗に終わるのである。これは、牧歌的自然が都市化の力に圧迫されていることを示すと同時に、牧歌的自然が都市で成功するための企てと相補的な関係をもつことは不可能である、ということも示していると考えられる。失敗を受け傷心したレスターはジェニーを連れて海外旅行へ出かけるが、その道中で社交界でのかつての知り合い **Letty** に会う。レティというのは、“polished, sympathetic, philosophic - schooled in all the niceties of polite society” (380) と描写され、“natural, sympathetic, emotional with no schooling in the ways of polite society, but with a feeling.[...]” (381) であるジェニーとは対照的な、都市を体現した女性である。彼女は彼に「あなたは年1万ドルで満足できるような小さい男ではない。」といい、“you ought to get back into the social figure to drift” (339) と、ジェニーと離れ本来の場所に戻るべきだと説く。彼女の影響を受けレスターは結局ジェニーと別れる決意をし、彼はシカゴへ、ジェニーは自然豊かな小さい町サンウッドへと離れていく。その後レスターはレティと結婚し、目を見張るほどの成功を遂げる。牧歌的自然に抱く理想を捨て、都市で生きることを選択したことで、社会での成功が可能になったことがここには示されている。

ジェニーとの関係を通して見られるこのようなレスターの社会的立場の変化

は、一見、二空間に挟まれたレスターの二面性を描いているようにも捉えられるが、レスターのこのような不安定な推移には、これまで見てきたように、都市化する自然と人々の理想としての牧歌的自然という二面性を持つジェニーの存在が影響している。ジェニーにより示される、都市に対して弱い立場におかれた自然のイメージが、レスターの都市化社会での不安定な立場の原因となっているのである。社会的成功のためには都市を選択せざるを得ないということがここには描かれ、都市と牧歌的自然の「共存」という理念の否定が2人の関係によっても示されているのである、

## ② それでも未だ理想である自然空間 —ジェニーが示す理想の肯定

このように見ていくと、『ジェニー・ゲアハート』においても、自然空間への理想を捨てきれないまま都市社会で勝者として生きていくことは出来ないということが描かれているように思われる。都市と牧歌的自然の「共存」という理念に対する否定的見解がジェニーの描写を通し強調されているようにも考えられる。しかしながら、作品におけるレスターのジェニーへの感情をみると、それは一概には言えない。作品の中で、レスターはジェニーとの生活について次のように考えている。

With Jennie he had really been happy, he had truly lived. She was necessary to him; the longer he stayed away the more he wanted her. (216)

これは、都市社会から離れたジェニーとの生活が精神的には平和で幸福であること、また、そこから離れ都市社会に傾倒すればするほどそこに憧れを感じるということを示している。都市化する社会と自然空間の共存が難しくなりつつも、人々が牧歌的自然に対し抱いている理想が未だ彼らの生活の中で影響力を持っていることが示されている。

自然がジェニーを通しレスターの理想として存在していることは、作品の最後における、病に伏したレスターのジェニーに対する態度からもみることが出来る。レティとの結婚後ケイン夫妻はニューヨークに住居を移し、散財を楽しむ華やかな生活を送るが、そのような贅沢三昧の生活はレスターの身体を脅かすこととなる。そして、クリスマス休暇前、仕事で一人訪れていたシカゴのホテルで突然の発作に襲われてしまう。自身の最期を感じたレスターは、ニューヨークで友人のパーティーに出席している自分の妻レティではなく、郊外で暮らすジェニーに会いたいと願い彼女を呼び出す。そして以下のように話すのである。

“I couldn’t go, Jennie, without seeing you again.”

“I’ve always wanted to say to you, Jennie,”[...] “that I haven’t been satisfied with the way we parted. It wasn’t the right thing, after all. I haven’t been any happier. I’m sorry. I wish now, for my own peace of mind, that I hadn’t done it.”

“Well, I’ve told you now, and I feel better. You’re a good woman, Jennie, and kind to come to me this way. I loved you. I love you now. I want to tell you that. It seems strange, but you’re the only woman I ever did love truly.” (422)

ここでレスターは都市社会の中で成功を遂げたにもかかわらず、自分の人生は幸せではなかったと告白している。父の遺言に脅え都市社会を選択してしまったことを「正しいことでは無かった」と言っているのである。レスターが結局のところ精神的にはジェニーのいる場所に幸せを求めていることが分かる。そう考えるとジェニーは、レスターに従属し、吸収されてしまう弱い存在であった一方で、最後まで牧歌的自然として存在することで、精神的な面では彼に従属させていたことがわかる。さらにレスターは、当時のままジェニーとの生活を続けていれば良かったのかもしれない、とまで考える (424)。これは、父により強要された選択の必要性が必ずしも正しいものではなかったことを示している。つまりドライサーは、都市と牧歌的自然の「共存」をいったん否定しながらも、それをレスターに後悔させることで「共存」という理念を肯定し、逆に、選択の必要性の方を否定しているのである。

この選択の必要性の否定は、ハイドパークの一軒家における、レスター、ジェニー、娘ヴェスタ、そしてジェニーの父ゲアハート氏の共同生活の場面にも見ることができる。自分が世間からみるとレスターには適さない女なのだと考えたジェニーは、手紙を残して家を出ていこうとする。結局そこにレスターが帰ってきてジェニーは引き止められるのであるが、その手紙の追伸に彼女は以下のように記している。

PS

I expect to go to Cleveland with papa. He needs me. He is all alone. But don’t come for me, Lester. It’s best that you shouldn’t. (249)

結局この記述をきっかけにレスターはハイドパークに家を持ち、そこにゲアハート氏も呼び寄せるようジェニーに提案する。ゲアハート氏は貧困を絵に描い

たような男であり、敬虔なキリスト教徒である。Marx の定義に当てはめて考えると、ゲアハート氏はまさに未開拓な自然を体現するものであり、都市を示すレスターとは相反する人物像としてみることができる。事実、作品の中で 2 人が親しく接することはそれまでほとんどなかった。しかし、ジェニーの言葉をきっかけにシカゴのハイドパークで一つ屋根の下の生活を始めることとなるのである。引っ越した直後にゲアハート氏は早くも「暖炉と庭の手入れ」を自分の仕事と決め込む。これは都市にやってきながらも自然とのつながりを棄てないゲアハート氏の態度を示すものである。共同生活が始まってからも、彼はレスターの都会的な生活ぶりに何かと不満を感じている。例えば、レスターがヴェスタにダンスを習わせようとするのとそれに対し、“Such irreligion!” (271) といい、ダンスをすることは墮落につながると言って猛反対している。自然空間を体現したゲアハート氏による都市への批判とも読めるが、しかし、ジェニーが間に立つことによって、結局彼らの共同生活はゲアハート氏が世を去るまで穏やかに続くのである。死の直前ゲアハート氏は、以前、都市社会に吸収されていくジェニーに対し “ruined!” (89) と行って彼女を勘当したことがあったにもかかわらず、“You’re a good girl, Jennie.” “You’ve been good to me. I’ve been hard and cross, but I’m an old man. You forgive me, don’t you?” (345) と、ジェニーに対し感謝の意を示すのである。ここでは、ジェニーが都市と自然空間という二空間の間に立ち、共存を可能にしていると同時に、彼女自身の存在価値も認められていることを見ることができる。つまり、ドライサーがジェニーを通し、都市社会と牧歌的自然の共存の理想を肯定していることがここにも示されているのである。

#### 4. まとめ — ジェニー像に示されたドライサーの見解

ここまで見てきたように、ジェニーは、「都市化する自然」という都市社会に吸収されていく立場にある自然を表象しながらも、同時に、「牧歌的自然空間」という人々の理想としての自然も表している。彼女が「都市化する自然」と「牧歌的自然」という、新しさと古さの二つのイメージを持つ、二面的な女性像として描かれていることが分かる。

では、ドライサー自身は、そのような二面性を示すジェニーをどのように捉えているのか。最後に、ドライサー自身の、都市と牧歌的自然の相補関係に対する見解を明らかにするため、ジェニーと類似する女性像として Thomas Hardy の *Tess of the d’Urbervilles* における Tess 像を取りあげ、ドライサーのジェニーに対する扱いをハーディのテスに対する扱いと比較したい。そうする

と、ハーディが作品の結末においてテスを否定的に捉えているように考えられる一方で、ドライサーは最後までジェニーを肯定的に捉えていることが分かり、彼の、ジェニーの示す二面性、あるいは二面的な空間の相補関係に対する肯定的見解がみえてくるのである。

『テス』におけるヒロインもジェニーと同様、二面性をもった女性像として描かれている。それは、『テス』につけられた *A Pure Woman. Faithfully Presented.* という副題からも明らかである。議論されることの多いこの“Pure”という単語に関して、作者であるハーディ自身は1892年に出版された『テス』5版のレビューの中で、“A Pure Woman”という言葉の持つ、社会価値に対立した自然価値の意義に注目するべきだ、と主張している (Tess 28)。ハーディがテスを自然価値と社会価値の対立を示すものとして描こうとしたことが分かる。ドライサーがハーディの影響を大きく受けていたことは、ドライサーと彼の長年の友人である H.L. Mencken との間に交わされた書簡からも見られる。<sup>11</sup> 実際、テスとジェニーのおかれた境遇は非常によく似ている。ジェニーと同様テスも、未婚で男と肉体的関係を持ち、子供をつくってしまうという過去を抱えたまま、別の男と恋に落ちる。しかし、彼女たちの類似した過去に対する作者の処遇の仕方には、いくつかの相違が見られる。自分の愛する男に過去を告白したテスとジェニーは共に、「当時の自分は若かったのだ」— “Angel, I was a child.” (T 258)、 “I was so young, Lester.” (J 213)<sup>12</sup> —と許しを乞うが、それに対しエンジェル、レスターともに “go to bed” (T 262, J 214) といい、夜の街へ歩きに出かける。この、過去の告白の場面とそれを受けた男たちの反応は非常に類似して描写されている。しかし、エンジェルがテスの過去を知った時、彼女に向い「自分が愛した女は君ではない」(T 255) とテスを責め、“Now, let us understand each other.” (T 278) と言った後、テスから離れて暮らすことを選択する一方で、レスターはジェニーの過去を知ってもなお自分がジェニーを愛していることを認め、“You and I might as well understand each other.” (J 217) と言った後も、今まで通りジェニーと生活することを選択する。エンジェルが惹かれていたのがテスの「純潔さ」であったのに対し、レスターが惹かれていたのはジェニーの存在そのものであったことが分かる。また、テスは作品の結末において処刑されてしまうが、ジェニーは最後まで罰されはしない。ハーディが最後にテスを罰したことは、テスのような過去を持つ女性に対する戒めともみられ、彼自身もテスの罪を認めているようにも考えられる。一方ドライサーは、作品の最後までジェニーを罰することはしない。むしろ、レスターやゲアハート氏の態度が示すように、作品の最後まで好意的な

立場でジェニーを描いている。ジェニーをテスを思わせる女性像として描きながらも、その処遇については、『テス』に見られるものとは異なり、肯定的な態度で描いているのである。

確かに、作品の結末に見られる、レスターの葬儀への参列を許されず教会の陰から1人見守るジェニーの姿は読者の同情を誘う。しかし、ニューヨークへ娯楽旅行に出かけていたため夫の死に目に立ち会うことができずに、ただ涙を流しているレティの姿に目を向けると、レスターの死に目に立ち会えたジェニーが不幸だと一概には言えない。レティは作品の中で、華やかな都市を示すものとして存在し、レスターに選択されるものとして描かれている。しかし、人生の最期においてレスターが必要としたのは、レティではなく、ジェニーだったのである。その点から、ドライサーが『ジェニー・ゲアハート』のヒロインに、彼の他の作品のヒロイン達に与えたほどの不幸な結末を与えてはいないことが分かる。つまり、ドライサーはジェニーの罪を認めてはおらず、最後までジェニーを肯定的に捉えているのである。そのように考えるとこの結末は、作品においてジェニーが示すもの—都市と自然の「共存」という理念—に対するドライサーの肯定的な見解を示すものであると捉える事ができよう。

自然が完全に都市化し、世俗的社会の一部となる様子は本作品から約15年後に出版される *An American Tragedy* (1925) に見ることができるが、<sup>13</sup> そこに至る前の段階である『ジェニー・ゲアハート』は、牧歌的であった自然空間の都市化の過程を示す作品であると同時に、資本主義社会下で人々が抱く、都市と自然の「共存」という理想に対するドライサーの肯定的な見解、両者の相補的な関係に対する彼自身の理想を示した作品なのである。

## 註

- 1 この見解は Walcutt のドライサーについての解釈にも示されている (274)。
- 2 ドライサーは作品の冒頭で、Columbia City から Chicago に向かうキャリーに対し、“the threads which bound her so lightly to girlhood and home were irretrievably broken.” (1) と述べ、その後作品の中でキャリーの田舎について一切触れていない。この極端な田舎の排除は都市の反田舎性を際立たせているとも考えられる。
- 3 例えば、Drouet と喧嘩別れをした後、職探しに疲れたキャリーは、ノースサイドにあるリンカーンパークへ行き花や動物、湖などを眺めて、都市での生活の疲れを紛らわすことを楽しみにしている (180)。
- 4 『シスター・キャリー』における urban-pastoral の見解については Seguin も参

- 照。
- 5 例として Walcutt を参照。
- 6 「新しい女性」の解釈は様々だが、本論においてはキャリアに見られるような、都市化社会の中で自身も都市化していく女性、作品の中で彼女自身が都市化社会を体現する女性像を指す。
- 7 Humma は、ジェニーを物質主義的社会 (material world) の外側の空間 (nature) を示すものとして捉え、都市社会から離れたものに対するレスターの憧れを指摘している。そして、本作品を都市小説である一方で田園小説でもあると指摘している。しかし、Humma の指摘は、依然レスターとジェニーを男女関係のなかでとらえるものに留まっている。本論ではよりジェニーの二面性に着目し、資本主義社会という枠組みで考えた時のジェニーの描写が示すものについて考える。
- 8 Theodore Dreiser's Encyclopedia の Jennie Gerhardt の項目にも、本作品のテーマがレスターの二面性であること、そして彼に選択の道が残されていないことであるという記述がある (209-12)。Hussman も参照。
- 9 本論では、ドライサーの登場人物に対する描写をアレゴリカルに読み取ることを試みる。従って、ここでは、レスター及びケイン家の人々を、都市社会を表すもの、ジェニー及びゲアハート家の人々を、牧歌的自然を表すものとして捉える。さらに、レスターのジェニーに対する感情または2人の不安定な関係を、都市と牧歌的自然の共存を表すものとする。
- 10 この点に関しては Gogol も、特にジェニーの父親像の描写を取り上げ、ゲアハート家が彼ら自身の人生を「恥」であると感じていることを指摘している。また Gogol はドライサー自身の生い立ちもとりあげ、ジェニーの家族に見られる「恥」の概念にはドライサー自身の敗者意識が表れていると述べている (138-139)。
- 11 Mencken はドライサー宛ての手紙の中で、彼の執筆活動の中にハーディの影響が見られることほめかしているが (229)、ドライサーはこれを認めている (234)。これに関しては Humma も参照。
- 12 以降 Tess を T、Jennie Gerhardt を J と略記する。
- 13 これについては筆者が別論にて論じている。

## 引用文献

- Dreiser, Theodore. *Sister Carrie*. 1900. 2nd ed. Ed. Donald Pizer. New York: Norton, 1991.
- . *Jennie Gerhardt*. New York: Penguin, 1989. Print.
- . *Dreiser-Mencken Letters: The Correspondence of Theodore Dreiser and H.L. Mencken*. Ed. Thomas P. Riggio. 2vols. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1986. Print.
- Eby, Clare Virginia. "Dreiser and Women." *The Cambridge Companion to Theodore Dreiser*. Ed. Leonard Cassuto and Clare Virginia Eby. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 142-159. Print.
- Gogol, Miriam. "Self-Sacrifice and Shame in Jennie Gerhardt." *Dreiser's Jennie*

- Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L. W. West III. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995. 136-146. Print.
- Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. 1891. Rpt. London: Macmillan, 1971. Print.
- Humma, John B. "Jennie Gerhardt and the Dream of the Pastoral." *Dreiser's Jennie Gerhardt. New Essays on the Restored Text*. Ed. James L.W. West III. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995.157-166. Print.
- Hussman, Lawrence E. Jr. "Jennie Gerhardt." *Dreiser and His Fiction: A Twentieth-Century Quest*. Philadelphia: U of Pennsylvania P,1983. 51-69. Print.
- Newlin, Keith. "Gennie Gerhardt." *A Theodore Dreiser Encyclopedia*. Westport: Greenwood, 2008. 209-212. Print.
- Machor, James L. "Pastoralism and the American Urban Ideal: Hawthorne, Whitman, and the Literary Pattern." *American Literature* 54(1982): 329-353. Print.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden. Technology and the Pastoral Ideal in America*. New York: Oxford UP, 1964. Print.
- Pinion, F.B. *Thomas Hardy: Art and Thought*. London: Macmillan, 1977. Print.
- Seguin, Robert. "The Burden of Toil: *Sister Carrie* as Urban Pastoral." *Around Quitting Time. Work and Middle-Class Fantasy in American Fiction*. Durham: Duke UP, 2001. Print.
- 土屋陽子「*An American Tragedy*における湖の描写—都市化の影響を受ける地方社会—」『中部アメリカ文学』15 (2012). In press.
- Walcutt, Charles Child. "The Three Stage of Theodore Dreiser's Naturalism." *PMLA* 55 (1940): 266-289. Print.
- Weir, Sybil B. "The Image of Women in Dreiser's Fiction, 1900-1925." *Pacific Coast Philology* 7 (1972): 65-71. Print.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: Oxford UP, 1973. Print.